

## 人生清算上のニーズ測定尺度の妥当性・信頼性の検討

森山 悦子<sup>1)</sup> 蔵屋敷 美紀<sup>1)</sup> 西田 実紗子<sup>2)</sup> 高間 静子<sup>1)</sup>

**要 旨**：本研究の目的は、高齢者における人生清算上のニーズ測定尺度を作成し、その妥当性および信頼性を検討することである。高齢者の生きがい、自己実現および達成感などに関する先行文献の検討や、著者らが体験した事例の分析をもとに概念枠組みを行った。これに沿って人生清算上のニーズを測定するための質問紙原案を作成し、65歳以上の自立した高齢者を対象に質問紙調査を行った。結果、人生清算上のニーズ測定尺度は、『生きた証を明確にする』『神仏に祈り悔いなく生きる』『人生への安らかな終止符』『俗生での諸事の整理』『今生で縁のあった人への感謝と懺悔をする』『自分の意義ある生き方で生きる』の6因子24項目からなる尺度であった。本尺度は、正規性、内容および表面妥当性、因子的妥当性、弁別的妥当性、基準関連妥当性の確認ができ、信頼性のある尺度であることが確認できた。

【Key words】 高齢者、人生清算、ニーズ、生き方、尺度

## 諸 言

人々は人生の最終段階を迎え、自らの生涯をどのように生きたかを振り返り、充実した生涯を終えたいと願う。それぞれの人の生き方には、その人の価値観などが大いに影響を与える。そして価値観は、その人がどのような環境の中で成長したかなどにより形成され、人生の最終段階での発達課題に影響を与えている。エリクソン<sup>1)</sup>は、人生の最終段階の発達課題を「自我の統合対絶望」と述べている。服部<sup>2)</sup>も、自分の生涯を意味あるものにまとめ、成熟と円熟の力によって「自我の統合」がなされていくとしている。一方で服部<sup>2)</sup>は、人生を振り返り何も得られなかった、やり直すにも遅すぎてやり直す時間がないと嘆き、「絶望」という危機が降りかかってくるとも述べている。山本<sup>3)</sup>は、現代においては超高齢社会にあり、第一線を退いた後に迎える長いこの時期をいかに自分らしく生きるかを考えることも人生の後半期の重要なテーマであると指摘している。また、米国を中心に研究が行われていた「サクセスフルエイジング」について松本ら<sup>4)</sup>は、「加齢に伴い失う衝撃を最小限にとどめ、肯定的な分野拡大の方法を見出し、人生に納得かつ満足し、自己を

調整しながら加齢(aging)の過程をライフサイクル上の発達課題に対応して望ましい形で進行することである。」と概念を示している。わが国においてもこの概念を活用し文化的背景や国民性を反映させながら、高齢社会をむかえた現在の高齢者の意識や姿など生き方を検証した研究がみられる<sup>5-7)</sup>。

さらに近年、スピリチュアリティ理論やスピリチュアル・ケア実践論への関心が高まっており、高齢者の生きる力を高め健康を考えるには重要な概念であると指摘している<sup>8-11)</sup>。また長江<sup>12)</sup>は、世界的な高齢化とこれに伴う病気や生活機能の低下を背景として国内外を問わず新しい概念が生まれ、1990年代より「エンド・オブ・ライフケア」という新しい用語が示されていることを紹介している。「エンド・オブ・ライフケア」について看護師の緩和ケア教育プログラムエルネック・ジャパンのカリキュラムでは、「病や老いなどにより、人が人生を終える時期に必要とされるケア」と定義されている。さらに、千葉大学大学院看護学科エンド・オブ・ライフケア看護学は、「診断名、健康状態、疾患名、年齢に関わらず差し迫った死あるいは、人が最期まで最善の生を生きることができるよう支援すること」と定義している。このケアは、

1) 福井医療短期大学 看護学科

2) 福井病院 2病棟  
(受付日 2015年5月)

病気が否かに関わらず、また高齢者も含み、生きる過程においてその人自身が主体的な生き方を模索することに意味があると示されている<sup>12)</sup>。

これらの研究では、高齢者自身の生き方、主体的な人との関わり、宗教に関わる慣習など神仏との関係性や死への受容や準備などは生きる力を高め、健康に生活することにつながると示されている。人生の最終段階にある人々に関わる看護者は、その人が健康か不健康であるかに関わらず、「その人にとって最善の人生を生きることができた」と感じられるように支援することが必要と考える。これらは、老年期における人生清算上のニーズの検討に深く関与する高齢者の実態を明確にしているととらえることができる。

このようなことから、高齢者が自分なりに人生は充実していたと感じられるには、まず彼らが生涯をどのように生きてきたか高齢者の人生を看護者は理解し受け入れることが求められる。さらに、高齢者がこれからの人生を悔いなく生きることができるよう、看護者は高齢者と向き合い支援することが重要な課題の1つと考える。

本研究においても、先行研究をはじめ著者らが体験した事例の分析等によって、高齢者には人生を終えるにあたり自分の人生を意義づけ、穏やかに終えたい、明らかに終えたい、成仏したい等のニーズがあることに着目した。看護者がそのニーズを把握するための尺度を作成し活用することで、対象とする人々の言葉から出てくるニーズを把握することができると考えた。

そこで本研究では人生清算上のニーズ測定尺度を作成し、その妥当性・信頼性を検討することを目的とした。

## 用語の定義

### 人生清算上のニーズ

一般的に「清算」とは、「これまでの関係・事柄に結末をつけること」とある<sup>13)</sup>。人生の最終段階に達した高齢者がそれぞれの生きてきた人生を振り返り、その中で培ってきた人間関係やあらゆる出来事において、整理したり結末をつけることと考えた。それらは物理的なことだけではなく精神的なことにおいても、それらを整理或いは結末をつけることのために高齢者が必要としていることや必要と考えていることととらえた。

## 研究対象と方法

### 1. 研究対象

A県内の地域で自立して生活している65歳以上の高齢者(以後高齢者)で、自分の考えを述べることのできる者250名とした。

### 2. 研究目的

人生清算上のニーズ測定尺度を作成し、その妥当性および信頼性を検討した。

### 3. 研究方法

#### 1) 質問紙原案の作成

人生清算上のニーズを測定するために、高間<sup>14)</sup>の人生清算上のニーズに関する研究、高齢者の生きがいや自己実現および達成感などに関する先行研究<sup>1, 2, 8, 15, 16, 17, 18)</sup>や研究者らが体験した事例の分析をもとに概念枠組みを行った。その結果、①自分の人生の意義を明確にする、②恩になった人に感謝し、迷惑をかけた人に謝罪する、③残りの人生を意義ある生き方をする、④人生でやり残していることを整理する、⑤苦痛なく安らかに終える、⑥成仏できるように魂を浄化する等とし、これら6つの概念を測定する質問紙原案42項目を作成した。回答肢は、「非常に願っている」から「全く願っていない」とし、これに5点から1点を与え得点化した。

#### 2) 人生清算上のニーズ測定尺度の妥当性・信頼性の検討

##### (1) 妥当性の検討

##### ① 内容妥当性

質問項目の内容妥当性は、尺度作成の経験がある短大教員2名で行い、各質問が人生清算上のニーズの概念を測定できる質問項目であるかを検討した。

##### ② 表面妥当性

表面妥当性は、当該調査の対象としない地域で生活している65歳以上の高齢者2名に、質問項目について内容の不明瞭さや回答方法の困難さについてチェックしてもらい検討した。

##### ③ 因子的妥当性

質問紙原案42項目について、主因子法・バリマックス回転で因子分析を行い、固有値1以上、因子負荷量0.4以上を項目決定の基準とした。

##### ④ 弁別的妥当性

各項目の識別性を検討し、質問項目中排除すべき項目の確認のためGP分析を行った。

##### ⑤ 基準関連妥当性

基準関連妥当性の検討は、人生清算上でのニーズの概念と関連する既存の尺度である自己受容尺度<sup>19)</sup>との関連をみるために、Pearsonの積率相関係数を確認した。

## (2) 信頼性の検討

尺度の信頼性は、Cronbach の信頼性係数  $\alpha$  を算出し確認した。

## 3) 調査内容

「調査内容は、人生清算上のニーズ測定のための質問紙原案 42 項目、基準関連妥当性をみるための自己受容尺度<sup>19)</sup>の質問項目 25 項目、対象の属性をみるための、性、年齢、病気の有無と病名、家族構成、就労の有無等とした。

## 4) 調査期間および方法

調査は、上記調査内容を示す調査表を作成し、2013 年 4 月下旬から 5 月下旬に実施した。対象者が参加する市民講座等の主催者に許可を得たあと研究者が出向き、調査表を配布し、対象者に調査の主旨を説明し、調査協力に承諾できる場合回答の上郵送にて返送することを依頼した。回収は、1 週間の留置法により行った。

## 5) データの解析

調査データの正規性(尖度, 歪度)の確認, 因子的妥当性(因子分析), 弁別的妥当性(GP 分析), 基準関連妥当性, Cronbach の信頼性係数  $\alpha$  等の算出には、統計ソフト SPSS17.0j を使用し、尺度作成過程の手順に従って解析した。

## 6) 倫理的配慮

調査の主旨, 自由意思による調査協力, 協力しなくても不利益は被らない, 無記名調査のため個人を特定できない, データは本研究以外流用しないことを説明し, 調査表の返送をもって調査協力を承諾されたものと判断する旨を口頭と調査依頼書で説明した。また, 自己受容尺度<sup>19)</sup>の使用は著者の承諾を得た。なお本研究は, 著者の所属機関の倫理委員会の承諾を得て行った。

## 結 果

## 1. 調査表の回収および対象者の背景

高齢者 250 名に調査表を配付した結果, 206 名(回収率 82.4%)が回収された。有効回答数は 200 名(有効回答率 80.0%)であった。対象者は, 男性 101 名(50.5%), 女性: 99 名(49.5%)で, 平均年齢は, 74.4 $\pm$ 6.7 歳(男性:74.9 $\pm$ 6.2 歳, 女性:74.6 $\pm$ 6.6 歳)であった。

対象者を背景別にみると, 全体のうち 170 名(85.0%)は家族と同居しており, 独居者は 26 名(13.0%)であった。就労中の人は 18 名(9.0%), 無職の人は 171 名(85.5%)であった。また, 病気をもっている人は 118 名(59.0%), 病気をもつて

いない人は 82 名(41.0%)であった(表 1)。

表 1 対象者の背景

n = 200

背 景	区 分	人 数	(%)
性 別	男 性	101	(50.5)
	女 性	99	(49.5)
年 齢	65歳以上	49	(24.5)
	70歳以上	52	(26.0)
	75歳以上	50	(25.0)
	80歳以上	39	(19.5)
	85歳以上	10	(5.0)
家族構成	独り暮らし	26	(13.0)
	家族と同居	170	(85.0)
	その他	1	(0.5)
	無回答	3	(1.5)
就 労	就労中	18	(9.0)
	休業中(いずれ就労)	3	(1.5)
	無職	171	(85.5)
	無回答	8	(4.0)
病気の有無	有	118	(59.0)
	無	82	(41.0)

## 2. データの正規性

調査から得られたデータの正規性を確認するために尖度・歪度を確認した結果, いずれも 1.6 以下であり, 正規性がみられた。

## 3. 妥当性の検討

## 1) 内容妥当性

尺度作成の経験がある短大教員 2 名で行い, 各質問が人生清算上のニーズの概念を測定できる質問項目であるか, 内容妥当性について検討した。その結果, 質問紙原案として作成した各概念を測定する上で質問項目の内容の追加や修正する必要はなく, 内容は網羅されているものと判断した。

## 2) 表面妥当性

表面妥当性について検討した結果, 当該調査の対象としない地域で生活している 65 歳以上の高齢者 2 名に, 質問内容の不明瞭な箇所, 理解しにくい表現, 回答方法の困難な部分について指摘してもらい修正した。主な指摘内容として, 質問内容の語句について, 「画数の多い漢字が見づらい」という指摘を受け, 読み仮名をつける, 文字サイズを見やすい大きさに調整するなどの調整を行なった。

## 3) 因子的妥当性

因子的妥当性の検討は, 主因子法・バリマックス回転で因子分析を行った。固有値 1 以上, 因子負荷量 0.4 以上を項目決定の基準とした結果, 6 因子 24 項目が抽出された。全項目の累積寄与率は 57.29%であった(表 2)。

表2 人生清算上のニーズにおける測定尺度の主因子法バリマックス回転後の結果

		因子					
		1	2	3	4	5	6
第1因子	親しまれてこの世を終えたい	0.746	0.200	0.165	0.111	0.145	0.108
1	人々にとって忘れられないことをして(残して)生きたい	0.715	0.243	0.171	0.231	0.141	-0.017
因	心から懺悔(ざんげ)ができる境地で終えたい	0.660	0.155	0.246	0.055	0.230	0.140
子		0.631	0.112	0.044	0.360	0.117	0.304
第2因子	神仏に感謝し導いていただけるように静かに見守ってほしい	0.186	0.834	0.208	0.129	0.208	-0.019
2	成仏をお祈りして終えたい	0.287	0.745	0.115	0.188	0.094	0.175
因	私は前向きに悔いの無いことをして終えたい	0.126	0.629	0.223	0.103	0.179	0.178
子	私は後悔するようなことにならないように生きたい	0.224	0.408	0.395	0.028	0.191	0.216
第3因子	私の過去と生き様を振り返り生に感謝して終えたい	0.202	0.329	0.770	0.068	0.145	0.226
3	最後になってつらい相談を持ち出してもらいたくない	0.180	0.003	0.577	0.318	0.314	0.083
因	私は今からも意義ある生き方をしていきたい	0.095	0.240	0.566	0.162	0.154	0.304
子	無我の境地で消えるように終えたい	0.236	0.210	0.503	0.174	0.187	0.196
第4因子	遺言書をきっちりと書いておきたい	0.095	0.132	0.170	0.663	0.102	0.160
4	財産分与しておきたい	0.124	0.090	0.010	0.588	0.115	0.250
因	戸籍上のこと、秘密事項、未整理事項を整理しておきたい	0.416	0.116	0.098	0.534	0.085	0.227
子	私は子供に感謝し謝っておきたい	0.191	0.161	0.291	0.511	0.078	0.079
第5因子	私は兄弟姉妹に感謝し謝っておきたい	0.261	0.055	0.258	0.250	0.721	0.101
5	私は友人に感謝し謝っておきたい	0.197	0.218	0.102	0.106	0.695	0.088
因	人生で恩になった人に感謝を述べたい	0.018	0.211	0.196	-0.015	0.563	0.355
子	私は子供に感謝し謝っておきたい	0.294	0.367	0.269	0.247	0.504	0.029
第6因子	こころが軽くなってわだかまりなく終えたい	0.209	0.179	0.181	0.156	0.028	0.636
6	私は生きるために目的を持って生きていきたい	0.177	0.312	0.064	0.284	0.199	0.628
因	私は自分が生きたいように生きていきたい	0.053	0.071	0.189	0.101	0.071	0.525
子	私は命を長らえさすような治療はしてほしくない	0.020	-0.129	0.105	0.279	0.139	0.434
固有値		2.730	2.604	2.275	2.082	2.082	1.977
寄与率		11.373	10.850	9.480	8.677	8.674	8.236
累積寄与率		11.373	22.223	31.703	40.379	49.053	57.289
第1因子：生きた証を明確にする		第2因子：神仏に折り悔いなく生きる					
第3因子：人生への安らかな終止符		第4因子：俗生での諸事の整理					
第5因子：今生で縁のあった人への感謝と懺悔(ざんげ)をする		第6因子：自分の意義ある生き様で生きる					

## 4) 弁別的妥当性

弁別的妥当性は、GP分析を行った。全体を4群に分けると上位・下位ともに50名ずつが抽出された。質問24項目の上位群と下位群の比較検討を行った結果、全項目において0.1%水準で有意差を認めた(表3)。

## 5) 基準関連妥当性

基準関連妥当性は、人生清算上のニーズの概念と関連する既存の尺度である自己受容尺度との関連をみるために、Pearsonの積率相関係数を確認すると $r=0.39$ ( $p<0.001$ )であった。

## 4. 信頼性の検討

第1因子から第6因子までのCronbachの信頼性係数 $\alpha$ は、第1因子0.855、第2因子0.838、第3因子0.807、第4因子0.756、第5因子0.819、第6因子0.685であり、尺度全体では0.921であった(表4)。

## 考 察

人生清算上のニーズを測定するための質問紙原案42項目の尖度・歪度はともに1.6以下で正規性があり、データとして使用可能と判断した。

表3 人生清算上のニーズ測定24項目

項目	上位群 (n=50)	下位群 (n=50)	比率の差の 検定 (t検定)
	平均得点	平均得点	
第1因子	1 4.46	2.63	10.725 ***
	2 4.16	2.47	8.005 ***
	3 4.30	2.53	9.587 ***
	4 4.43	2.74	8.107 ***
第2因子	1 4.59	2.98	8.845 ***
	2 4.68	2.79	10.582 ***
	3 4.57	3.23	8.041 ***
	4 4.65	3.10	8.193 ***
第3因子	1 4.73	2.98	11.264 ***
	2 4.46	2.67	8.486 ***
	3 4.59	3.21	8.467 ***
	4 4.70	2.86	10.377 ***
第4因子	1 3.59	2.12	5.334 ***
	2 3.59	2.35	4.706 ***
	3 4.19	2.26	7.633 ***
	4 3.78	2.12	6.042 ***
第5因子	1 4.51	2.74	9.912 ***
	2 4.27	2.74	7.544 ***
	3 4.59	3.40	6.734 ***
	4 4.68	2.53	12.815 ***
第6因子	1 4.73	3.30	7.165 ***
	2 4.62	3.21	7.881 ***
	3 4.38	3.56	4.799 ***
	4 4.05	2.98	3.627 ***

\*\*\*  $p<0.001$

表4 尺度の信頼性係数

因子	項目数	因子名	$\alpha$ 係数*
第1因子	4	生きた証を明確にする	0.855
第2因子	4	神仏に祈り悔いなく生きる	0.838
第3因子	4	人生への安らかな終止符	0.807
第4因子	4	俗生での諸事の整理	0.756
第5因子	4	今生で縁のあった人への感謝と懺悔をする	0.819
第6因子	4	自分の意義ある生き様で生きる	0.685
尺度全体	24		0.921

\* Cronbachの $\alpha$ 係数

因子の妥当性は、バリマックス回転を行い因子分析した結果、6因子24項目が抽出された。6因子それぞれの内容の質から、第1因子は『生きた証を明確にする』、第2因子は『神仏に祈り悔いなく生きる』、第3因子は『人生への安らかな終止符』、第4因子は『俗生での諸事の整理』、第5因子は『今生で縁のあった人への感謝と懺悔（ざんげ）をする』、第6因子は『自分の意義ある生き様で生きる』と命名した。

第1因子は、「惜しまれてこの世を終えたい」、「人々にとって忘れられないことをして（残して）おきたい」「心から懺悔（ざんげ）ができる境地で終えたい」、「家族に言うべきことはっきりさせておきたい」の4項目があり、これらの内容の質から『生きた証を明確にする』と命名した。高齢者においても、マズロー<sup>20)</sup>が示す「愛と所属の欲求」が自身の存在に対する欲求として示されており、人生の最終段階において自身の存在を明確することにより、自身の生きかたを清算しているものと考えられる。

第2因子は、「神仏に感謝し導いていただけるように静かに見守ってほしい」、「成仏をお祈りして終えたい」、「私は前向きに悔いの無いことをして終えたい」、「私は後悔するようなことにならないように生きたい」があり、これらの内容の質から『神仏に祈り悔いなく生きる』と命名した。人生の最終段階にある高齢者の生きかたとして、今日まで無事に過ごすことのできた人生について感謝するとともに、これからの人生を無事生きられるようにと神仏に祈る思いからくるものと考えられる。三澤<sup>9)</sup>は、高齢者は乗り越えてきた道のりを意味づけながら、神などの見えない力に支えられていることを自覚していると明らかにしている。また高井<sup>10)</sup>は、神仏や大自然により守られているといった「超越力を意識」しており、このような思いは加齢に伴い増加していることを指摘している。本研究の高齢者においても神仏への祈りを意識していることから、自らの生き方について神仏や大自然に守られていることで自らが支えられ、無事に過ごすことができたと感じ

謝し、さらに未来に向かっても神仏に祈り見守られながら、悔いなく無事に生きることができるよう望んでいるものと考えられる。

第3因子は、「私の過去と生き様を振り返り生に感謝して終えたい」、「最後になってつらい相談を持ち出してもらいたくない」、「私は今からも意義ある生き方をしていきたい」、「無我の境地で消えるように終えたい」があり、これらの内容の質から『人生への安らかな終止符』と命名した。竹田ら<sup>8)</sup>は、高齢者のスピリチュアリティの概念構成要素の1つとして、「死と死にゆくことへの態度」として死への準備や態度を示唆し、逃れられない死に対しどのように今を生きるか（死生観）ということをとらえている。本研究においても、高齢者は逃れられない死への準備を安らかに行うことを望んでおり、将来に向かう生き方を示しているものと考えられる。

第4因子は、「遺言書をきっちりと書いておきたい」、「財産分与をしておきたい」、「戸籍上のこと、秘密事項、未整理事項を整理しておきたい」、「土地や家屋を整理したい」があり、これらの内容の質から、『俗生での諸事の整理』と命名した。竹田ら<sup>8)</sup>は、この時期にある高齢者が他者との調和に着目しており、家族などへの気遣い等重要他者への思いやりを指摘している。本研究においても同様に、自らが他者へ迷惑をかけないように整理して人生を終えることを望んでいると考えられた。

第5因子は、「私は兄弟姉妹に感謝し謝っておきたい」、「私は友人に感謝し謝っておきたい」、「人生で恩になった人に感謝を述べたい」、「私は子供に感謝し謝っておきたい」等があり、これらの内容の質から『今生で縁のあった人への感謝と懺悔をする』と命名した。三澤<sup>9)</sup>は、家族や友人、社会との調和、許し許されたいというニーズの存在など、「人との絆」の必要性に遭遇することを確認し自己の存在を確認していることを指摘している。また、竹田ら<sup>8)</sup>は重要他者からの支えを指摘している。さらに高井<sup>10,11)</sup>も加齢に伴い、他者への感謝の気持ちを持ち内面的な充実を重視しようとする感覚や意識を強めていると述べている。本研究の高齢者においても縁のある人への感謝と懺悔の表出は、自分にとって大切な人からの支えに対する謝意を表出し自己の存在を確認しているものと考えられる。

第6因子は、「こころが軽くなってわだかまり無く終えたい」、「私は生きるために目的をもって生きたい」、「私は自分が生きたいように生きていきたい」、「私は命を長らえさすような治療はしてほしくない」があり、これらの内容の質から『自分の意義ある生き様で生きる』と命名した。三澤<sup>9)</sup>は自

己実現や自らの死への受容とこれからの人生への展望等を指摘している。本研究においても、高齢者自身がいかに最期を迎えるか、言い換えれば残された人生をどう生きるかを示しているものと考ええる。

GP 分析を行い、弁別的妥当性を確認した結果、0.1%水準で有意差を認め、すべての調査項目は本尺度の項目としての妥当性が確認できた。さらに基準関連妥当性では、人生清算上のニーズの概念に関連する概念である「自己受容尺度」を用いて得られたデータとの関係をみると、1%水準で有意な相関がみられた。本尺度の構成概念を決定できる項目として採択できる項目であることが確認できた。尺度の信頼性については Cronbach の信頼性係数  $\alpha$  で確認すると全因子が  $\alpha = 0.685 \sim 0.855$  の範囲にあり、尺度全体で 0.921 であり信頼性のあることが確認できた。以上のことから、人生清算上のニーズ測定尺度は、妥当性・信頼性のある尺度であるものと判断する。

本尺度の活用は、高齢者のもつ苦悩を具体的に明らかにし、高齢者自身が「自分なりに納得して人生を終えることができた」と感じるような看護の提供をする上で、彼らのニーズを把握することに寄与できるものと考ええる。また、尺度の中に示された内容のそれぞれは、高齢者にケアを提供するにあたり高齢者の内面を理解するために必要な視点になりうると考える。

しかし、本研究における尺度の信頼性係数  $\alpha$  において、第 6 因子の  $\alpha$  係数は 0.685 を示している。一部には、 $\alpha$  係数は概ね 0.7 以上でなければ尺度とはみなせないとの指摘もある。0.7 に近い数値を示しているものの、係数が小さければ尺度内に目的とする特性を測定できない項目が含まれていることを意味する。そのため、より妥当な尺度とするには質問紙内容等の検討を重ねる必要があると考える。

## 結 論

人生清算上のニーズ測定尺度は、データの正規性、内容および表面妥当性、因子的妥当性、弁別的妥当性、基準関連妥当性の確認ができ、信頼性のある 6 因子 24 項目からなる尺度であることが確認できた。

今後の課題として、より妥当な尺度を目指し質問紙内容等の検討を重ねることが必要である。さらに本研究結果の再現性を確認するため、新たに 65 歳以上の高齢者を対象とした集団に調査を実施し確認する必要がある。

## 謝 辞

本研究を進めるにあたり、尺度の使用を快諾してくださった高崎健康福祉大学の板津裕己教授、調査に際し多大な協力と配慮をいただきました市民講座の企画に携わられた関係部署の皆様様に深謝いたします。

## 文 献

- 1) E. H. Erikson, Joan M. Erikson : THE LIFE CYCLE COMPLETED A REVIEW Expanded Education, 1997, 村瀬孝雄, 近藤邦夫訳, ライフサイクル その完結(増補版). みすず書房, 東京, 78-86, 2011.
- 2) 服部祥子:生涯人間発達論 人間への深い理解と愛情を育むために(第2版). pp177-180, 医学書院, 東京, 2010.
- 3) 山本多喜司:人生移行の発達心理学(初版). pp282-285, 北大路書房, 2005.
- 4) 松本啓子, 渡辺文子:後期高齢者の Successful Aging の意味一郡部に居住する高齢者の聞き取り調査から一. 日本看護研究学会誌 27(5) : 25-30, 2004.
- 5) 小田利勝:サクセスフル・エイジングに関する概念的考察と研究課題. 徳島大学社会科学 研究 6:127-139, 1993.
- 6) 谷井康子:サクセスフル・エイジング概念分析. 日本看護学会誌 21(2) :56-63, 2001.
- 7) 小手川良江, 上村朋子他:M市在住の中老年の生活実態とサクセスフルエイジング. Intramural Research Report3 : 56-67, 2004.
- 8) 竹田恵子, 太湯好子:日本人高齢者のスピリチュアリティ概念構造の検討. 川崎医療福祉学会誌 16(1) :53-66, 2006.
- 9) 三澤久恵:地域で生活する高齢者のスピリチュアリティに関する研究. 桜美林大学老年学研究科 2008 年度博士論文要旨:1-12, 2008.
- 10) 高井範子:人間関係観の発達の变化と生き方態度との関連. 大阪大学大学院人間科学研究科紀要 34:1-20, 2008.
- 11) 高井範子:ポジティブな生き方態度の形成要因に関する検討-青年期から高齢期を対象として-. 大成学院大学紀要 13:79-90, 2011.
- 12) 長江弘子:エンド・オブ・ライフケアの意味するもの. 家族看護 12(1) :010-019, 2014.
- 13) デジタル大辞泉, 小学館, 2008.

- 14) 高間静子:人生清算上のニーズ. 日本看護研究学会誌 13(3):41, 1990.
- 15) 神谷恵美子:生きがいについて(初版). pp49-92, pp137-232, みすず書房, 東京, 1981.
- 16) 野村千文:「高齢者の生きがい」の概念分析. 日本看護科学学会誌 25(3):61-66, 2005.
- 17) 大野昌美他:農村部に暮らす自律高齢者の社会に向けた生きる意欲の構造. 北陸公衆衛生学会誌 36(2):39-45, 2010.
- 18) 石川基樹:高齢者の生きがいの特性-自由記述データの分析から-. 人間学研究 22(1):1-13, 2009.
- 19) 板津裕己:自己受容尺度短縮版(SASSV)作成の試み. Japanese Journal of Applied Psychology 14:59-65, 1989.
- 20) フランク・ゴーフル, 小口忠彦訳:マズローの心理学(初版). 産能大学出版部, 東京, 1972.